

あとがき

瓢箪から駒とはまさにこのことである。我々はまさか本当に京都まで歩くとは想像もしていなかった。

事の発端はコロナの発生である。自由な外出がままならぬ中で家内と始めたのが散歩である。しかし1年以上近所を歩き回ってもコロナの勢いは一向衰えない。ここでふと思い出したのが会社同期の友人吉田清直さんから聞いていた徒歩による旧東海道五十三次の旅である。同氏は日本の主たる街道はほとんど制覇し、さらにフランスからスペインにかけての **Santiago de Compostela** に向けた巡礼路も走破した人で、同氏の書いた東海道、中山道やスペインの旅の記録も読んでいた。ここでふと思いついたのが自宅（大森）から20分ほどのところに旧東海道が通っていることで、2021年1月に一度日本橋から品川・鈴ヶ森辺りまで歩いてみようということになった。このときにはまさか京都まで歩くことは全く想定しておらず単に散歩の目先を変えるくらいのつもりだった。

しかし始めて訪れた品川宿がことのほか興味深く、その後神奈川、戸塚と歩いているうちに徐々に気合いが入り、10月から11月にかけて箱根を越えて三島に達するに及んで明確に京都が視野に入ってきた。とはいえ歩き始めた翌月の2021年2月早々に二人とも肺炎にかかったり、秋には幸子の目の手術で中断するなど紆余曲折はあったが、始めてから1年半、総歩行距離約500kmを33日間（一日平均16.5km）をかけて本当に京都まで行ってしまった（総歩数は115万歩、一日平均34800歩）。82才と79才の後期高齢者カップルとしてはよくここまでできたと思う。健康に感謝、二人の主治医である西元慶治先生にも感謝である。

これも偏に全期間に亘る吉田さんの激励と助言があって初めて可能となったものである。同氏の書いた東海道道中記は参考文献に掲げた八木牧夫氏の本と共に我々のバイブルであり、歩行中の我々必携のものであった。鈴鹿越えの前には同氏に時間を貰って色々とお話を聞いた。

もうお一方会社先輩の村瀬泰雄さんから度々励ましのメールを頂いたが、その中に、ブラ歩きは「山口家子々孫々に残る素晴らしい、そして温かい夫婦の偉業を成し遂げたことになる」とあった。このメールを頂いたのは我々が岡崎まで歩いたときだったが、これ以来目標達成に向けて益々力が入ることになった。村瀬さんには我々の完歩祝いとして特製の「鉄道唱歌『東海道五十三次』」の冊子まで頂き終始応援を頂いたのは感謝に堪えないところである。

ブラ歩きの総括は冒頭に1頁でまとめてあるが、以下は歩き終えたあとの感想である。

上記の通り何となく始めたブラ歩きであるが、徐々に気合いが入ってきた。特に後半は家内の方が熱心で帰宅するとすぐにその日に歩いた場所をパソコン上の地図で確認し、次に歩く宿場について調べるようになった。お陰で大磯、小田原などでの一寸した道の間違いはあったものの、基本的には全く道を間違えることなく全工程を終了した。小生はかなり方向音痴で、こうしたこともあって「ブラ歩き」によって家庭内の力関係は家内はかなり有利に働いた。とはいえ、この年になって初めて夫婦共通の趣味を見いだしたことは思ってもみない効果であった。家内はこれからどうしようかと考えている模様である。小生も無理をしない範囲で付き合うつもりである。この趣味は子供達からも好意的に見られている様子なので今後大手を振って出かけられる。

上記とほぼ同じことだが、夫婦の間で共通の話題が格段に増えた。苦しかった箱根の急坂の話、駿河湾から見た富士の美しさ、由比の桜海老料理、袋井のうな重と宮宿の蓬莱軒のひつまぶしの味、あちこちで立ち寄った古民家カフェと芭蕉の句碑、日坂や関宿の街並み、鈴鹿越えに際しての緊張感、京都に向けての最後の難所である逢坂の関と日ノ岡峠など話題は尽きない。これも今後の生活を豊かにしてくれると思う。

「ブラ歩き」の収穫は見知らぬ人との出会いである。同じく旧東海道を歩いている人にも随分あって言葉を交わしたほか、町の人からは温かい言葉を何度もかけられた。また、古民家カフェのような場所でオーナーの方々と親しくなったケースも何件かある。このうち数人の方とはその後メールや手紙のやりとりもあった。こうした経験は飛行機や車での旅行ではほとんど経験したことがなかったが、実に貴重な財産となった。この他偶々藤枝宿と四日市宿に学生時代のオーケストラ活動の親友が住んでおり、奥方も含めて彼らと何十年ぶりかで晚餐を共にしながら旧交を温めることが出来たのも良い思い出である。

旧東海道を歩いて気がついたことは、道路は自動車のためのもので歩行者用ではないということである。特に人口が少ない場所での傾向が強い。標識も車専用、更に交差点で歩行者用の横断歩道と信号がなく、歩行者は道路を渡るのに地下道か歩道橋を渡らなければならない箇所が何カ所もあった。これは重い荷物を背負って歩く旅行者や高齢者には全く **Friendly** ではない。我々はこうした場所に来ると車の途切れた瞬間を狙って早足で自動車専用道路を横断するという早業を見つけ、最後の方は得意技になってきた。しかし子供達にバレ、それ以降信号無視を禁止されたがその後もやむを得ず何度か試みざるを得なかった。

旧東海道はまた、歩行者にとって危険な道でもある。旧道は道幅が狭く道路脇に狭い歩道はあるが一方通行ではない場合が多く、車のすれ違いの時には道の端に立ち尽くして車をやり過ごすという経験を数え切れないほどした。最も怖かったのは豊橋と豊川の間にある豊

川放水路に架かる狭い橋の上で、この橋の前後約を含めて約百メートルは全く歩道がない。しかも道は対面通行でトラックが猛スピードですれ違う。ここを歩いて渡るのである。こんな怖い思いをしたのは初めてだ。この他大井川の橋に達する堤防上の道でも歩道がなくふらつけばトラックにひかれるか堤防の崖から転落するような場所、また、天竜橋手前の歩道橋も信号もない道の横断など冗談ではなく半分命がけで歩いたと言っても良いようなところがあった。天下の旧東海道にこうしたところがあってはいけない。このうち豊橋については帰京後市役所に電話で実情を連絡し善処を要請したが、国と県にも一肌脱いで検討して貰いたいところだ。

場所によっては一日中歩いてもコンビニが全くないところもあった。これから歩く人はこの辺りをよく調べておくべきだと思う。また、全般的には街道のあちこちにトイレが整備され、中にはウオッシュレット着きの場所もいくつかあったが、反面和式しかないところもあり、今後高齢者が増えると問題ではないかと思う。このトイレ整備問題は地域による差が大きいと感じた。

上記の通り色々あったが、全体としては旧東海道を二人で完歩できたことは我々夫婦最大の共同事業であり財産である。お世話になった全ての方々に感謝の念で一杯である。

山口光恒

軽い気持ちで始めた旧東海道歩き、最後まで到達するとは思っていませんでした。「せめて箱根を越えないと東海道を歩いたとは言えない」との思いから、なんとか箱根を越えて三島まで行くことにしました。その後、沼津の海岸から見た富士山、薩埵峠からの富士山に励まされ、その先その先と歩むことが出来ました。

ご友人の皆さま、途中でお会いした皆さまの優しさ励ましにたくさん力をいただきました。そのお陰で老人夫婦でもなんとか無事踏破することができました。皆様に感謝いたします。有り難うございました。

また、時々痲痺を起こす私を穏やかに見守ってくれた我が夫にも感謝です。仕事一筋で、一般社会常識が欠如している(?)夫も、この旅でコンビニで買い物ができるようになり、今まで食べる機会がなかったコンビニのおにぎりやサンドウィッチを食べられるようになりました。今まで知らない人へこちらから声をかけることがなかった夫が、地元の方にこちらから「こんにちわ」と声をかけ情報を教えて頂いたりお店の人とお喋りしたりと54年間一緒に居て、こういうこともできる人だったのかと嬉しい発見もありました。究極の方向音痴は直りませんでしたが。

最後に、日本は綺麗です。景色もですがどこへ行ってもゴミがなく勿論ワンちゃんの落とし物もない。そして皆さん優しいことを実感いたしました。ちょっと道を聞くだけでもわざわざ外まで出てきて説明してくださったり、「送らしましょう」と言ってくださったり。そして「頑張ってください、気をつけて」の言葉に心が温かくなりました。
最後に、心配しつつも見守ってくれた子供達孫達、有り難う。

山口幸子

2022年6月11日

著者略歴

山口光恒 1939年生まれ 大学卒業後保険会社勤務を経て大学教授、その後研究機関勤務、2021年3月引退 専門は気候変動問題 URL:<http://m-yamaguchi.jp> 趣味クラシック音楽
山口幸子 1943年生まれ 専業主婦 趣味は手芸など 結婚歴54年

参考文献

吉田清直・西村耕二 「東海道弥次喜多道中記」2003年 非売品
八木牧夫 「ちゃんと歩ける東海道五十三次」2019年 山と溪谷社
児玉幸多監修 「東海道五十三次を歩く」全5冊 1999年 講談社
小林 勇 「東海道五十三次 八十二歳一人歩き」2011年 審美社
上記のうちはじめの2つに特にお世話になった。